

音楽と
非人間
第四回

会場

九州大学大橋キャンパス
音響特殊棟 録音スタジオ

2024年9月29日(日)

15時半開場 16時開演

このたび、2024年9月に九州大学大橋キャンパス音響特殊棟において「音楽と非人間」第4回公演を開催する運びとなりました。

本演奏会のテーマは、「音楽と非人間」です。今回は、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学をもとに、「人間の音」と「非人間」を「電子音楽」から新たな視点で紐解いていきます。

「音楽と非人間」第4回では、3つの重要な問いについて扱います。その問いとは、「機械をどのように用いれば、生命が発する物質的・生物学的な音の再現することが出来るのか?」、「再現された音は我々の内的世界を反映しているといえるのか?」「非人間（すなわち自然や工業、人間ではない者たちの領域、そして精神世界）は未知の感覚との出会いをどのようにもたらしてくれるのか?」です。1960年代から現代にわたる、さまざまな時代の作曲家が名を連ねています。彼らは具体と合成音の技術、そしてさまざまな電子機器やソフトウェアを駆使することで自らの求める表現を成し遂げてきました。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたり、JSPS 科研費 23K00215 の助成、そして後援を賜りました九州大学芸術工学部をはじめ、ご協力をいただきました各位に心より厚く御礼申し上げます。

主催者

シリーズコンセプト

今年度の「音楽と非人間」というコンサートシリーズは、3年間の研究プロジェクトの一環で、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学を基にして、人間の音と非人間の音の関係を新たな視点から解釈します。

作曲家たちは自然や精神的な要素との関わりを探求し、前近代の哲学や能楽の作品からインスピレーションを得ています。自然からのインスピレーションやフィールドレコーディング、伝統楽器を用いた現代音楽が交差し、不安定な時代において音楽を創り、聴き、共有する、(そして議論する)、意味のある方法を定めていきます。

9月29日(日) 16:00

曲目

マックス・マッシュューズ：Bicycle Built for Two (1961)

近藤譲：東京湾 (1987)

カルロ・フォルリヴェジ：The Tunnel of Light (2001)

ゼミソン・ダリル：井の滴り (2023)

カルロ・フォルリヴェジ：Through the Looking Glass (1997)

休憩

マルコ・ストロッパ：Why Should You Run? (2023)

カルロ・フォルリヴェジ：Requiem (1999)

ジオナサン・ハーヴェイ：Mortuos Plango, Vivos Voco (1980)

カルロ・フォルリヴェジ：Elements (2017)

後 九州大学  大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

援  UNIVERSITÉ CÔTE D'AZUR

本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

電子音楽と非人間：親和性と他者性、境界についての探究

カルロ・フォルリヴェジ、ゼミソン・ダリル

この電子音楽のコンサートのプログラムはカルロ・フォルリヴェジ（コートダジュール大学 / アデレード大学 / ロッシーニ国立音楽院）とゼミソン・ダリル（九州大学）によって編纂されました。このコンサートは「音楽と非人間」のテーマのもと企画された4つ目のイベントであり、過去・現在の人間の著作と自然の一部ではない（と思われてきた）ものとの関与やその結果として構築された関係性について幅広く探求するものです。

今回のセッションでは3つの重要な問いについて、明確に扱います。

1. 物体や生物学的な現象による反射音を模倣する現在の技術について、その機能性を向上させるために、どのような方法論を用いることができるのか
2. それらの技術によって生成された音はどれほど本物であるといえるのか、あるいはそれは我々の内的な反響に過ぎないのか。
3. これまで知られていなかった人間の性質や進化の発見に、人間が外界から受け取る音の知覚（自然や産業の環境音の擬音語、非人間的・非感覚的な擬音語、実体を持たない擬態語）がどのように寄与するのか。

今回のプログラムでは1960年代から現代に至るまで、近現代の幅広い時代の作曲家が名を連ねています。彼らは具体音や実際の物体、合成音声の技術、さらに様々な電子機器やソフトウェアを駆使して自らの望む表現を実現してきました。作品の演奏順はあえて年代順を避けるようにしました。これらとはあるあらずじに従うようなひとつづきで演奏されます。このあらずじの中では、年代の離れた作品では電子機器の音質が著しく異なっていることも考慮に入れ、時間的な隔たりを過度に意識しないようにしています。これは量子的なメタファーを構築したとも、時代的な位置取りよりも音楽的オブジェクトにエネルギーを見出すことを優先したとも言えます。

このプログラムにはカルロ・フォルリヴェジの4つの作品が組み込まれています。これらはそれぞれ非人間の別の側面に関係しており、当初からプログラムに組み込みたいと思っていました。1997年から2017年の間、ボンビドゥ・センターのIRCAMやオーフスのDIEM、ラジオ・フランスのINA-GRMといった様々なハイテクなスタジオで作曲されたそれらを、フォルリヴェジは自身に通じるコンセプトを持つ作曲家たちの作品の間に挟み込んでおり、それらはこのコンサート・テーマを代表するようなものとなっています。マルコ・ストロッパとジョナサン・ハーヴェイは1990年代にフォルリヴェジと学生時代を共にした2人で、ゼミソン・ダリルとは彼が2008年に東京で作曲特論を教えている時に出会い、近藤譲はゼミソンの師であり、そしてマックス・マシュューズはコンピュータープログラミングを用いて人間の声を模倣することを考案・探求した、電子音楽の先駆者、先見の明を持った科学者・芸術家として彼がプログラムに入れたかった人物です。

マルコ・ストロッパの作品（Why Should You Run?）とゼミソン・ダリルの作品（井の滴り）は最も直近の2023年に作られたもので、制作には最先端のソフトウェアや機器が用いられています。多くの現代芸術がそうであるように、これらの作品も語りかけるものですが、ある意味これらが語るのは物語ではなく、“イベント”であると言えます。すなわち、ここでは登場人物は丸々非人間であるのですが、同時に非人間とは“人類の祖先”の文献や資料が見つかる度に再構成・再解釈されるものでもあります。

そこから過去に遡っていくと、フォルリヴェジの4つの作品、Elements (2017)、The Tunnel of Light (2001)、Requiem (1999)、そしてThrough the Looking Glass (1997)があります。

そして、3つ目の作品群として1990年代以前の作品が挙げられます。近藤譲の東京湾 (1987)、ジョナサン・ハーヴェイのMortuos Plango, Vivos Voco (1980)、そしてマックス・マシュューズのBicycle Built for Two (1961)を持って、この電子音楽の閉ざされた庭園は完結します。

ここからは時系列を遡るように、各作品の特徴を「非人間」のテーマとの関わり」と「演奏の技術的・美学的側面」から見ていきましょう。

Why Should You Run? (2023)

マルコ・ストロッパはこのプログラムの中では屈指の作品の幅を誇る作曲家です。1970年代後半から始まった彼の活動は今なお続いており、その50年以上にわたるコンピューター／電気音響の研究と作曲の活動のうち、多くの時間を IRCAM にて費やしています。彼の作品では、後に紹介する他の作曲とは異なり、純粋な電子的な表現世界への探求を強調することが重要となります。実際、この作品の中ではサンプリングされた音も加工された音も存在しません。しかし、これには批判的思考がある訳ではなく、一切を物理モデリングによって生成された（つまりところ非人間由来の）一次元的音波を、物質的／音響的な存在性と形而上学性を兼ね備えた現実感へと進化させるような、技術的・創造的・美学的な可能性を、電子世界の表現ポテンシャルに見出そうとする術を、目立たせているに過ぎないのです。ストロッパ自身は次のように述べています。

物理モデリングはよく知られた“サンプリング”や“信号合成”のような音声合成とは異なる手法で音を合成するものである。サンプリングでは、元となるのは録音された音である。信号合成ではコンピューターはオシレーターやフィルター、ディストーターといった音を生成する、あるいは加工するモジュールに接続する。物理モデリングでは元となるのは弾性体（膜や弦、管、手作りの体積など）であり、それらは計算機上で集約され、隆起モデル（打撃、シングル／ダブルリード、弓、フルートの息遣いなど）によって振動する…… 私がこの作品でこの手法を用いたのはむしろ、2つの安定した物体間での、不安定で、束の間に移り行く音を観察するためだった。このためにカルロ・ローレンツィと私はいくつかの仮想的楽器モデルの Max パージョンを開発した。同時に我々は、それらの生の音をリアルタイムで観察するべく、制御パラメーターを慎重に動かしていた。ほとんどの場合、音が生成されないか、安定した音が生成されるだけだったが、ある予期せぬ状況において、そして幸運も相まって、非常に興味深い、過渡状態の音が生成された。私たちはこれらの試行を何時間にもわたって記録し、それを未編集のフィルムのように扱った。そして最も表現的で、音楽的に惹かれる音を選定、整理、加工して、作曲として予定していた手法を構築した。

井の滴り (2023)

ゼミソン・ダリルの井の滴り (2023) は東京大学の MEMU EARTH LAB から依頼を受けた 2023 年の 'Sounding Garden' プロジェクトのための作品です。このプロジェクトは、小石川植物園に展示された 10 の電氣的、または電気音響的作品によって構成され、作品たちは庭園の周りやさまざまな温室、建物の中に設置されました。6 つのスピーカーのためのこの作品は、江戸時代、薬草園の隣に建っていた病院の井戸のために書かれました。6 つのチャンネルのそれぞれは完全に独立しており、それぞれが異なる音源を持ちあわせています。庭園内のスピーカーは井戸を取り囲むように円形に配置され、円のまさに中心（すなわち井戸）以外では 6 つ全てを同時に聴くのが難しいように位置しています。6 つの音源は、(1) 井戸深くのアンビエントな共鳴のサウンドスケープ録音、(2) ピエゾコンタクトマイクロフォンによる井戸のアンビエントな振動、(3) 夕暮れの薬草園のサウンドスケープ録音、(4) 能楽師、今村嘉太郎による金春善竹の題目「雨月物語」クライマックスの台詞の詠唱（善竹の能は謙遜の美学、男女の仕事の平等（女性の仕事には治療も含まれる）、自然と人間を同等に含む精神性の理解をテーマにしている）、(5) 自身の声を用いて薬草たちの声を伝える女性シャーマン、こやまよしこ（の声）、(6) ピオラ奏者（赤坂智子、10/21 の音楽と非人間第 5 回にも出演する）が生松原の海岸近くで、自身の楽器を用いて鳴らしたカモメを模した音、です。大地、空、水の音を一緒に持ち込むことで、そして植物と人間の平等、女性の仕事／知識（治療／薬草）と男性のその平等、過去（その地の歴史、また禅竹の美学と精神性）と現在の平等を強調することで、未来について——我々は現代が忘れてきた、あるいは抑圧してきた過去から何を学び得るのか——聴き手の興味を促します。

Elements (2017)

カルロ・フォルリヴェジの4つの作品は繊細なサウンドデザインの賜物であり、このサウンドデザインはフォルリヴェジの作曲における聴覚的、心理的瞬間の重要性を補強するのに役立っています。これらの作品はか弱さから猛烈さへの進行を表しており、変容は音のテクスチャー、共鳴、ダイナミクスについての丹念なアプローチによってのみ成し遂げられます。

年代を遡るように見ていくと、まず現れるのがElements (2017)で、この作品はニコラ・コロオロの助力のもと、INA-GRMで製作され、4つの古典的要素（空気、大地、炎、水）について探求し、豊かな3次元の電子音を奏でます。この音はダイナミックレンジの技巧と物質的な元素が感情的・非物質的な様相に組み込まれるような物語的な状況が特徴的です。その音は筆者(すなわちフォルリヴェジ)の手によって、彼の父親が働いていたレンガ工場にて録音されたもので、彼が作品を捧げたい記憶でもあります。幼少期、筆者は週末の何時間かをその工場で過ごし、その空間が訴えかける音響とクラシック音楽が染み込んだサイバネティックな想像を掻き立てる力に魅了されました。

The Tunnel of Light (2001)

The Tunnel of Light (2001)では、フォルリヴェジは魂が円筒状のトンネルを通して、巨大な光へと昇っていき、そのトンネルでは、完全な暗闇の中で同心円が遠近法によって見えるという様子を概念化しました。この短いサウンド作品は一見無秩序でありながら構造化された活動（視覚）とほとんど静止した音の欠片（黙想）を対比し、ヒエロニムス・ボスの著名な絵画であるThe Tunnel of Lightを彷彿とさせます。

Requiem (1999)

Requiem (1999)は聖歌や管弦楽、複数の文化背景をもつ儀礼用オブジェたちの音やサンプルを加工して、音響的な寺院を表現します。この構成は3つのセクション（Komm, Les pleurs, ()）に区切られ、数秒間の沈黙の区間によって分かれています。多様な文化圏からやってきた音楽的要素は一つの作品に統合され、そこには中央アメリカ（レインスティック）、アフリカ（ホイッスル）、インド（鈴）、日本（土鉢）、ヨーロッパ（マッチとクリスタルグラス）が含まれています。この作品では、第1楽章“Komm”において、人工的なクワイヤが用いられ、J.S. バッハのモテットBWV229の最初の数小節が精巧なコンピューターによってもたらされます。続けて、第2楽章の名前として引用されている、ムッシュ・ド・サント＝コロンプ（17世紀）のヴィオールのための“Les pleurs”が組み込まれていきます。これは、多次元を横断するような多角的な聴取体験を創造し、ゴシック・ポストモダンな音空間を彷彿とさせます。この作品の根底にあるテーマは平和、平穏、疲れや悲しみが終わることへの切望です。

Through the Looking-Glass (1997)

メタファー的なThrough the Looking-Glass (1997)を横断する透明な大気は、鳥のさえずりが自然の文脈から幻想的な質の、あるいは我々の知覚を拡張するような完全に電子的な文脈へと徐々に、段階的に変化していく中で、旅の終わりと交差する架空の鏡の観念を呼び起こします。このサウンドスケープは確率的な介入というコンセプトに基づいており、これには現実における音から人工的な音への移り変わりも含まれています。この作品の始まりでは、現実上の音のみが存在していますが、“鏡を越える”ことで、電子的な要素しか残らない、音要素の完全な移行がみられます。したがって、このプロセスは確率的でありながら、手でコントロール可能なクロスフェードを生み出す2つのサウンドセットの組み合わせによって構成されています。

東京湾（1987）

別の地域では、近藤謙の作品、東京湾（1987）が個人による電子計算、そして——ほぼ誰もが作る能力を手に入れたという意味での——電子音楽の民主化の幕開けに位置します。近藤は自身でこの作品について以下のように書いています。

この曲は器楽曲を電子音楽にリアリゼーションした作品。原曲は「ノン・プロジェクション」というピアノ2台とオーケストラの曲。

この頃は既にPCの時代に入っていて、PCの方が普通の意味で綺麗な音を作ることが出来たが、電子音楽はテープで聴くしかない音楽だから、何らかの音の力が欲しい。艶やかで磨かれた音はどうしてもつまらない、汚れていても力が感じられる音を作りたいと考えた。

Mortuos, Plango, Vivos Voco（1980）

ジョナサン・ハーヴェイはイギリス現代音楽の著名な人物です。Mortuos, Plango, Vivos Voco（1980）はIRCAMで、スタンリー・ヘインズとザビエル・ロデットの助力のもと、ジョナサン・ハーヴェイが制作した楽曲です。この作品で用いられている音はイギリス、ウィンチェスター大聖堂のテナーベルと作曲者の息子、ドミニクの声です。歌詞はベルに刻まれたものが由来しています。“私は死者を悼み、生者に祈りを呼びかける” 広く用いられている初期の音声合成プログラムであり、ベル研究所で開発され、増幅器と発振器のコンピューターモデルを含む Music V は音の分析と変更のために用いられました。しかしこの音楽における最も重要な技術的進歩は、スペクトル的な作曲技法を完全に理解する能力であり、それは後に美学と（器楽と電子音楽の両方における）膨大な音列の技法に影響を及ぼしました。この音楽は円状の8チャンネルによって観客席に投影されます。

Bicycle Built for Two（1961）

最後に、マックス・マッシュューズと後世に影響を及ぼした彼の作品である Bicycle Built for Two（1961）について考えることとします。マッシュューズはデジタルコンピューターでデジタルに音声合成する方法を発見した最初の人物で、すなわち最初のデジタルシンセサイザーを創り出した人物です。ベル研究所で働く中で、彼はデジタル音楽言語を開発した最初の人となり、1961年には Music IV（ハーヴェイが用いた Music V プログラムの前身）を生み出しました。これは機械から人の声をデジタル合成するのに用いられました。その結果がハーリー・ダクレによって作曲されたポピュラーソング“Daisy Bell”です。続くように、“Bicycle Built for Two”はスタンリー・キューブリックが監督した2001年宇宙の旅に起用されました。この作品の主題は陽気で、音楽的な雰囲気はいくぶん滑稽に見えますが、重要なのは、この作品が人間と非人間の音の関係性、さらには新しい視点から見た人間と非人間の変容の関係性の解釈におけるターニングポイントの中核を担っていると認識することです。

コンポーザー

カルロ・フォルリヴェジ / Carlo Forlivesi



写真：Joel Micah Miller

イタリアの作曲家・演奏家・研究者。ボローニャ国立音楽院を経てミラノヴェルディ音楽院を首席で卒業、作曲修士号取得、ローマ・アカデミア・聖チェチリアにて作曲博士号を取得。IRCAM-Centre Georges Pompidou、DIEM (Danish Institute Of Electroacoustic Music)、GRM-Radio France にてコンピューター音楽研究に参加、東京音楽大学大学院では日本政府文部科学省府給費生として日本伝統音楽・舞踊とりわけアイヌ音楽研究に取り組む他、アメリカフルブライト研究員も務める。オーケストラから日本伝統楽器など多岐に

渡る作品を作曲し、世界中で演奏される。ソルボンヌ大学・パリ国立高等音楽院等で講義の他、様々な賞を受賞。オルガン演奏家としての活動も長く、イタリアサンタ・キアラ聖堂常任オルガニスト、パリ・ノートルダム大聖堂ほか様々な国で演奏活動を繰り広げる。ドイツシュトゥットガルト音楽芸術大学作曲科教授等を歴任、現在イタリアロッシーニ国立音楽院教授。カルロ・フォルリヴェジ ホームページ
<https://unou-forlivesi.jimdosite.com/carlo-forlivesi-composer/>

マックス・マッシュューズ / Max Mathews



マックス・マッシュューズはコンピューターの支援による作曲・パフォーマンスの分野においてバイオニアと呼べる存在であり、コンピューター音楽の先駆者の1人として認められている。1926年11月13日、ネブラスカ州コロンプス生まれ。カリフォルニア工科大学で電気工学の学士号を取得し、1954年にはマサチューセッツ工科大学にて博士号を取得。大学修了後すぐにベル電話研究所に就職し、続いて行動・音響研究センターのディレクターに就任する。通信とデジタル信号処理に関する研究に携わった後、音楽分野

におけるコンピューターの利用に興味を持ち、最初のコンピューターによる音楽演奏プログラム“Music I”を制作する。さらに、音声処理と音声合成の研究に従事し、1968年の映画『2001年宇宙の旅』では、“Bicycle Built for Two”を歌ったコンピューター“HAL”の声の制作者としてクレジットされている。IRCAM (パリ) の顧問を務め、1987年にスタンフォード大学の特任教授に就任。のちに同大学の名誉教授となる。2011年没。

近藤 譲 / Jo KONDO



写真：コンドウ・マサコ

1947年10月28日東京生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。1977～78年ロックフェラー3世財団フェロー。1979年には英コロンビア州ヴィクトリア大学の客員講師を務める。1986年ブリティッシュ・

カウンシル・シニア・フェローとしてロンドンに滞在。1987年米国ハートフォードのハート音楽大学コンポーザー・イン・レジデンス。同年及び2000年英ダーティントン国際サマースクールで講師を、2015年米ロチェスター大学イーストマン音楽院において特別客員教授を務めた。国内においては、エリザベト音楽大学教授、お茶の水女子大学・大学院教授として、また、東京藝術大学でも長年教鞭をとり、現在、昭和音楽大学教授、お茶の水女子大学名誉教授。1980年には現代音楽アンサンブル「ムジカ・ブラクティカ」を結成し活動、1991年の解散まで音楽監督を務めた。国内外の優れた演奏家や演奏団体、音楽機関から委嘱を受け、独奏曲から室内楽、管

弦楽、声楽曲、オペラ、そして電子音楽作品まで、広範にわたる作品を発表。作曲と美学に関する執筆活動も活発に行っており、『ものがたり西洋音楽史』では毎日出版文化賞特別賞を受賞。日本音楽コンクール作曲部門をはじめとした国内外の作曲コンクールの審査員、柴田南雄音楽評論賞審査委員、京都賞音楽部門選考委員なども務めている。現在、日本現代音楽協会理事長。2012年にはアメリカ芸術・文学アカデミー（American Academy of Arts and Letters）外国人名誉会員（終身）に選出。2024年3月、公益財団法人サントリー芸術財団より、第55回（2023年度）サントリー音楽賞の贈賞が発表された。

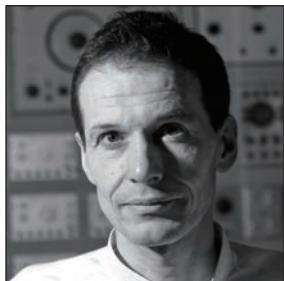
ゼミソン・ダリル / Daryl Jamieson



ヨーク大学（英）で博士号取得（作曲）。その後来日、東京藝大の作曲家・近藤譲氏の薫陶を受ける。九州大学助教（現職）。第3回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。作品は能や日本の伝統音楽、詩歌から強い影響を受けており、現在は音楽的時間と歌枕の心理——地理学に深い関心を持っている。主要作品に「歌枕シリーズ」、演劇音楽「ヴァニタス・シリーズ」三部作、大規

模室内楽曲「コノソ」がある。現代音楽美学に関する論文多数。ミュージック・シァター「工房・寂」芸術監督。
www.daryljamieson.com/jp

マルコ・ストロッパ / Marco Stroppa



写真：Roberto Masotti, © Casa Ricordi, Milan

作曲家・研究者・教育家。1959年にイタリア、ヴェローナに生まれ、イタリアにて音楽を学ぶ。専門はピアノ、合唱、指揮、作曲、電子音楽。マサチューセッツ工科大学メ

ディア研究所にてコンピューターサイエンス、認知心理学、人工知能に関する学びを深める。1980年から1984年までパドバの計算音響センターに務め、そこで

“Traiettorie”を作曲する。この作品はすぐさま大きな成功を収め、定期的に演奏され続けている。

1982年、ビエール・ブレースの招待を受けてIRCAMに参加し、彼の音楽的発展の中枢を担うコラボレーションが始まる。

尊敬を集める教育者としてハンガリー、ソンバトヘイのインターナショナル・バルトーク・セミナーにて作曲とコンピューター音楽のワークショップを創設し、13年間教鞭を執る。1999年、シュトゥット

ガルトの音楽演劇大学において作曲の教授に任命される。また、パリ、およびリヨン国立高等音楽・舞踊学校（CNSMD）でも教鞭を執る。

ストロッパの作品群にはオーケストラ、伝統楽器、電子音楽、ラジオオペラ、劇場音楽のための膨大な作品が含まれる。

彼の最初のオペラ作品“Re Orso”はアッリーゴ・ボイトの台本に基づいており、2012年5月にパリのオペラ＝コミック座において大きな喝采と共に初演された。

2019-20年、栄誉あるベルリン高等研究所のフェローを経験。著名なドイツの音楽レビュー誌“Musik Konzepte”の186巻にて特集が組まれる。

ジョナサン・ハーヴェイ / Jonathan Harvey



20世紀を代表するイギリス人作曲家ジョナサン・ハーヴェイ(1939年-2012年)は、輝くような美しさを持つ音楽を作曲した。ハーヴェイの作品は、しばしば音響と電子音の先駆的な融合を伴い、常に外界と内なる精神的な経験の両方を受け入れるように努めている。

[フェイパー・ミュージック出版社による、ゼミソン]

今後の「音楽と非人間」

音楽と非人間 第5回

日時

2024年10月21日（月）19:00

プログラム

J.S. バッハ：「無伴奏組曲」第4番

「無伴奏組曲」第5番

ゼミソン・ダリル：「デスカント4」（2021）自然環境の中におけるヴィオラのために

アフタートークなし

演奏者 赤坂智子（ヴィオラ）

第5回では、全く異なる方法で神霊的な非人間との関わりに焦点を当てた2人の作曲家の作品を、ヴィオラ奏者、赤坂智子がお届けします。

18世紀初頭のヨハン・セバスティアン・バッハは、構造的・数学的な完全性を目指す音楽は宇宙におけるキリスト教的变化に寄与すると信じており、その考えは彼の音楽全般、特にヴィオラ組曲に表れています。この曲を記述し、演奏し、聴くことで、私たちは、ひいてはこの世界は、より完全で魅力的なものになるというのです。

ゼミソン・ダリル（九州大学助教）による『デスカント4』では、ヴィオラ奏者は環境の一部として耳を傾けられます。この曲では世界の完全性を追求したり、世界を変えようとするのではなく、世界に溶け込み、その一部になろうとするのです。

チケット URL は peatix でのみ販売します。（当日券の販売はありません。）

<https://nonhumanmusic4-5.peatix.com>（または、以下の Peatix QR コードをご利用ください）



X (旧 Twitter)

https://twitter.com/geikou_otobunka



Peatix

<https://nonhumanmusic4-5.peatix.com>



芸術工学部 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/@KyushuUniversityDesign>

後 九州大学  大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

援  UNIVERSITÉ CÔTE D'AZUR

本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

音楽と
非人間